

## 青少年アンケート 2013 結果報告と分析

<回答教会> 18教会（教区26教会中）

（香川）三本松、丸亀、善通寺、坂出、番町、桜町 （徳島）徳島、鳴門

（高知）江の口、中島町 （愛媛）新居浜、道後、今治、西条、松山、八幡浜、宇和島、郡中

### ① 青少年の人数について（回答教会すべての合計）

籍がない子どもが教会に来ているケースではその人数を在籍数にも加えました。

	在籍数	年に数回以上教会に来ている人の数と在籍数に対する割合	
幼 児	70人	61人	87%
小学生	149人	90人	60%
中学生	63人	28人	44%
高校生	85人	24人	28%
青年（35歳以下）	289人	59人	20%

（分析 ①について・・・分析はすべて田中正史神父様によります）

全体的な傾向として、在籍数に対する教会への参加率は年齢が高くなるほど低下していて、特に青年の参加率が全体の五分之一というのは大きな問題です。というのは青年はこれから教会の活動を担っていてもらいたい主体ですから、この層の青年がたくさん教会から抜けることによってさらなる高齢化が加速しているように思われます。

おそらく今どこの小教区でも積極的に活動している年代は60歳代であり、その次を担う40～50歳代の信者が欠けています。その次の20～30歳代も欠けていますが、結婚している信者は子どもと一緒に参加するのでその分参加率はじゃっかん上がります。

アンケート結果から単純計算して各教会に16名ほどの青年がいることになるので、今後、少なくともその半数が参加できるような措置をとる必要があるのではないのでしょうか。

また、小学校高学年から中学生、高校生の参加率が段階的に低下している理由は、部活動や塾など子どもの学校生活や受験に向けての準備のためであると思われるが、子どもがそのような活動を通して社会生活を身に付けたり、将来のキャリアのための準備をしていくことは将来の教会のための貴重な知的財産になりうるものですから、子どもたちが部活や塾を優先して教会に来ない現状を頭ごなしに否定的に見て教会第一主義を唱えることは必ずしも正しくないと思います。子どもたちの置かれている状況に理解を示しながらも、毎日曜日ミサや教会活動に参加することができなくても、クリスマス、復活祭ミサとその後のパーティーや夏の教会キャンプなど季節に応じた企画への参加を促すことによって自分が教会に帰属しているという意識をもたせることも大切なのではないのでしょうか。

### ② 教会学校（土曜学校・日曜学校）について

教会学校がある（10教会） ・ 教会学校がない（8教会）

#### \* 教会学校がある教会への質問

教会学校の運営状況、教材、昨年度の内容については4～8ページをご覧ください。

### \* 教会学校がない教会への質問

- 教会学校は必要である（6教会） ・ 教会学校は必要でない（2教会）  
必要でないとした理由  
・ 子どもがいない。 ・ 子どもが少ない（小中学生が3人）。

#### ③ 教会学校という形ではなく、子どもの信仰教育として行われていること

- ・ 小学生1名が、修道院でシスターから信仰教育を受けている。
- ・ ミサ後の小教区全体の語らいの中で話している。
- ・ 母は堅信のため、子は初聖体のため、毎週神父様から教理指導を受けている。
- ・ 家庭内で日曜日の朝の祈りや晩の祈り（旧約聖書からカテケジス、一週間の分かち合い）
- ・ 土曜の夜のみことばの分かち合いで、子どものための質問、カテケジス
- ・ 平和教育の1つとして戦争体験を聴く会を実施、対象は中学生以上。
- ・ 聖カタリナ女子高校の生徒を教会に主日、あるいは平日に案内。また、高校生たちと週1回のペースで一室を借りて語り合う時間、聖書について話す時間を設けている。
- ・ 初聖体や堅信の勉強会
- ・ 不定期「ちびっこ集まれ」を開いている。
- ・ 洗礼式や堅信式の準備のために事前に週一回、3ヶ月間要理の勉強をしている。
- ・ 毎週土曜日（19:00~45分程度）聖書と典礼の中の福音のところを子ども達が読んで感じたことを言う。そこで神父様がアドバイスを言い書かれている内容について分かりやすく説明を行っている。（参加者 小中生6名 内受洗者2名、4名は親が受洗者）

（分析 ②、③について）

教会学校がない教会が約半数近くありますが、教会内のスペースの問題、子どもの人数の問題、ふさわしいリーダーがいないなど、各教会でそれぞれ固有の問題があるように思われます。

ただ、教会学校という定期的に関校される形式でなくても、その時々が必要に応じて、たとえば初聖体や堅信など信者として青少年が成長していく節目の時にそれを準備することができる最低限の学びの環境は各教会提供できているように思われます。

また小さな小教区の場合は、その教会そのものが一つの家族のようなものになっていて、そこから子どもだけを切り離して別のところで活動をするということがふさわしくないということもあるでしょう。そのような場合、家族の中に子どもがいるほうがより自然で家族としての一体感を実感することができるのですから、大人と一緒にいながら、なおかつ子どもが主体となれるような子どものためのミサをときどき行ったり、親子で参加することができるおかあさんのための聖書講座などを試みるのもいいのではないのでしょうか。そのような試みを通して少しずつ子どもの数が増えたり子ども同士の関わりがしっかりとしてきたものになったときに教会学校へと自然と移行することができるかもしれません。

#### ④ 一般の幼児や青少年が気楽に教会を訪れることができるための集まり

- ・ 聖書の勉強会 ・ クリスマス会 ・ 若者と聖書 ・ 習字教室 ・ ピアノ教室
- ・ 人形劇の発表会、一般の方に向けてチラシを配布して呼びかけた。
- ・ 以前は中高生対象の勉強会（シーズ）があった。

（分析 ④について）

青少年が気楽に教会を訪れることができるためにもっとも大切なことはそのために何をするかとい

うことよりも、まずその場に温かい家族的な雰囲気があることだと思います。なぜなら今の青少年はたくさん情報量をもっているし、何が面白いかという知識ももっています。しかし、彼らに不足していることは自分のことを理解してくれ受け入れてくれる場所や、自分を必要としてくれるところだと思います。だから彼らが主体的に関わることができる環境を提供してあげるだけで何をしなければならないのかは彼ら自身が発見するのではないのでしょうか。

そのためのきっかけとしてクリスマス会や「若者と聖書」やさまざまな教室を企画することはいいと思います。ただ単発で終わるのではなく、継続して教会に関わることができるためにはやはり青少年の教会における主体化という問題に取り組む必要があると思います。

⑤ 高松教区が行っている青少年の行事について（割合は回答教会数18を100%とする）

行 事(日程は 2013 年度予定)	知っているとした 教会数と割合		参加していると答えた 教会数と割合	
	数	割合	数	割合
子ども & 中高生の集い(4月)	18	100%	11	61%
若者と聖書(春期、秋期、冬季)	14	78%	9	50%
元気を出そう中高生ミサ(7月) (サレジオ志願生の歌)	18	100%	9	50%
召命の集い(8月、2月)	16	89%	6	33%
広島平和行進(8月)	18	100%	8	44%
歌って踊って平和を語ろう(8月)	16	89%	2	11%
青年の集い(11月)	12	67%	3	17%
釜ヶ崎訪問(2月)	10	56%	1	6%

(分析 ⑤について)

高松教区が教区として企画している行事のうち「子ども&中高生の集い」、「元気を出そう中高生ミサ」などたくさん青少年が集まる場所には青少年を引き付ける魅力があると思います。普段大きな家族のような関わりを同世代の人たち、特に同世代の信者の人たちと関わる機会がない青少年たちにとってこのような経験は人生の中で掛け替えのないものになるでしょう。

おそらくこのような企画をするに当たってそれを準備している大人のスタッフの人たちの苦労は並大抵のものではないでしょう。しかしそうであるから逆にそれに参加している青少年はお客さんという立場になりがちですが、そこは今度の検討課題でもあるように思われます。

今から30年以上前の各小教区で少なくとも4、5名以上の学生がいた中学生会、高校生会では教区の青少年の集いのための歌集や文集作りを各小教区が分担していたことがあり、その主体は高校生たちでした。今の子どもたちと昔の子どもたちは確かに違うと思いますが、高松教区が教区として企画している今の行事を経験をした青少年たちが小教区に戻ってからも経験を活かせるような工夫も必要かもしれません。